

## 聖地の観光資源化による沖縄表象の創出

塩月 亮子

本発表では、沖縄の地域再生における「スピリチュアリテイ」を用いた新たな文化表象創出の動きについて、沖縄本島南部にある南城市の観光事業の事例を基に考察を試みた。その結果、現在、県内外の多くの人々が世界遺産となった斎場御嶽(セーファークウタキ)をはじめとする沖縄の聖地を訪れているが、そのような傾向を地元の行政側もさらに促進・強化する政策を打ち出していることが明らかとなった。

『南城市地域再生マネージャー事業 二〇〇六―二〇〇八年 度活動報告書』(沖縄県南城市まちづくり推進課編、二〇〇九、一頁)によれば、「南城市には、緑、水、海、風、太陽といった恵まれた自然環境と、琉球民族発祥神話の地、五穀栽培発祥伝説の地としての長い歴史」があり、「世界遺産に登録された斎場御嶽(セーふあーうたき)、神々の島・久高島に代表される、沖縄の精神文化を象徴する歴史遺産」がある。このような地域資源のネットワーキ化を「見る」、「癒す」、「学ぶ」をモットーに行い、観光・保養の拠点づくりを目指そうとしているが、その際、(一)豊かな自然や聖地と(二)免疫力や治癒力を高める統合医療との考え方を結びつけ、南城市ならではのツーリズムを確立したいとする。これらの構想に基づき、二〇〇七年四月には「琉球のスピリチュアリテイを求めて」と題した冊子やウェブサイトの作成を行い、「拝所巡礼の東御廻り(あが

うまーい)と統合医療をキーワードにした今後の取り組みを紹介した」(同報告書、二頁)。以上から、南城市は地域再生に景観や聖地、歴史などの伝統文化を活用し、それらを「スピリチュアリテイ」の思想と積極的に接合させることで、新たな文化創造を試みていることがわかる。

実際、南城市は、二〇〇四年から東御廻り(アガリウマールイ)とよばれる聖地巡拝の慣習を活用した「国際ジョイアスロン」や、二〇一一年から「ecoスピリットライドin南城市」というイベントを開催している。前者のパンプレットには「RYUKYU RESPECT」、「癒しの空間―感じよう 神々の息吹き。」とあり、参加者は「SPIRITUAL WALKING」とプリントされたTシャツを着て、久高島や斎場御嶽(セーファークウタキ)をはじめとする聖地を徒歩で巡る。後者のイベントでは「世界遺産コース」、「首里城・平和祈念コース」、「琉球王朝聖地巡礼 東御廻りコース」という三種類のコースが用意され、参加者は自転車でそれぞれ設定された聖地を廻る。

これらの事例のように、いま沖縄では、伝統行事を基に遺跡や聖地を巡ることで歴史や文化を学び、スピリチュアリテイを高め、同時に健康を促進し、観光を楽しむことを意図した新たな行事が創出されている。これは、ひいては沖縄の人自身の「沖縄(あるいは自分の住む場所)は霊位が高い」というアイデンティティ形成にも寄与しているといえる。このようなイベントは、沖縄の神や信仰に関して地元の人々が再認識するよい機会となっているからである。それは、聖地を用いた経済活性化という意味合い以上に、神観念そのものの活性化を第一に目

指しているようにもみえる。実際、そのように開催目的を説明する主催者の人もいる。また、どの聖地をコースとしてピックアップするかに関して、聖地の霊位の高さや優越性など霊的観点から意見を言うイベント関係者もいる。単なるレクリエーションとしてのイベント以上の意味づけがなされていると考えられるのである。

従って、観光化は「本土化」の一部とみなせるものの、沖縄ではそれを自らの文化表象創出の機会と捉え、特に斎場御嶽(セーファークウタキ)のある南城市では、「スピリチュアリーテ」と従来の民俗宗教を接合させ、伝統的聖地巡拝慣習などを活用しながら、新たな聖地巡拝文化を生み出している。これは、観光文化の「沖縄化」ということができよう。

### 社会事業としての遺骨収集

—— 沖縄の戦死者の現在 ——

佐藤 壮 広

沖縄本島では現在、地域に根差した死者慣行と本土の流儀との間の葛藤や、双方の交差によって、市民参加型の新しいかたちの遺骨収集事業が展開しつつある。本発表ではこの事業を提案・推進している具志堅隆松という人物を事例として紹介し、当該社会のメンバーへ何がもたらされ、またそこにどのような葛藤があるかを概観し、現代沖縄の遺骨収集事業は生者と死者の双方にとっての「慰藉事業」としての意義をもつということ述べる。

遺骨収集活動を行ってきたボランティア団体「ガマフヤー」の代表・具志堅隆松氏は、土地造成中の那覇市真嘉比地区で、遺骨・遺品の収集作業を行っている。報告者は、遺骨収集を三〇年間にわたり行ってきた具志堅氏へのインタビューと、激戦地だった真嘉比地区の見学・訪問を通し、遺骨収集と雇用創出という二つの事業が結びついてくる現代沖縄社会の事情を調査した。その結果、次の二点が明らかになった。

一、戦後の沖縄の土地開発事業の過程で、多数の遺骨が、掘り起こされた盛土とともに、新しい街づくりや土地基盤整備などに再利用され続けてきたということ。那覇市真嘉比に隣接する那覇新都心地区は、沖縄戦の激戦地であり、五千人以上の戦死者が出た場所である。戦後、返還されたこの地区にはモノレールが通り、いまや大型ショッピングモール、美術館・博物館などが建ちならぶ活気ある都市空間となっている。開発工事の過程で掘り起こされ、発見されたはずの遺骨は、本人特定されないまま集められ、処分されてきた。厚生労働省の直轄事業となっていないはずの遺骨収集は、実情においては工事請負の土建業者に任せられ、工期遵守や開発優先の動きの中でその多くが適正に扱われてこなかった。

二、具志堅氏は、三〇年間、骨を拾いながら死者の「死」と向き合ってきたおり、その活動は「骨」をめぐる民俗としても真摯かつ持続力あるものである。沖縄の民俗文化において継承されてきた死者の「骨」に対する特別な感覚(沖縄文化において遺骨はフニシン「骨の神」「神となった骨」)は、死者の痕跡や生存のリアリティを再可視化する引き金になる。死者を不在